

## お米のはなし

お米や稲に関するちょっとした情報・豆知識を専門家が綴る「お米のはなし」の第47弾をお届けします。

(シリーズ担当：R. I.)

### 第47話 米作日本一について

米作日本一については、我が大先達お三方の解説を紹介して、説明に替えたいと思います。

1. 西尾敏彦（2008）は、「「米作日本一」農家が教えてくれた水のかげひき」<sup>1</sup>で、以下のよう述べています。

「米作日本一」といっても、今では知らない人が多いだろう。昭和24年（1949）から20年間つづいた朝日新聞主催の多収穫競励事業である。農林省や全農中央会の支援もあり、当時の農家の増産意欲をかき立てた。参加した農家数は毎年およそ2万人、延べ40万人に及ぶというから、その盛り上がりぶりがうかがわれる。

最近稲の多収技術はあまり歓迎されないが、この競励会が農家の稲作技術を底上げしたことは間違いない。同時にこの競励会が、それまで農家個人のものであった多収技術に科学の光を当てる機会となり、稲作研究躍進の契機となったことも特記しておきたい。

水のかげひきで最初に注目を集めたのは、昭和26年（1951）に日本一に輝いた高岡市の土肥敏夫の米づくりであった。当時29歳の土肥は短稈品種の「短銀坊主」を使い、それまでの記録を更新、10a当たり858kgの多収をあげた。庄川下流域の沖積地帯にあった彼の田は、足が20cmももぐるといふ半湿田だった。根ぐされが出やすく、収穫期ころには稲が倒伏しやすい田んぼで、せいぜい480kg程度しかとれなかったという。

多収穫に挑むに際し、土肥が最初に試みたのは田の片側に深溝を掘り、排水をよくすることであった。彼は、中干し期間を除いて4日ごとに落水し、数時間田面を空気にさらすという水管理をくり返したのである。「腐れ水を捨てる」というのが彼の言い分であった。土壌の酸欠を防ぐだけでなく、有機物分解から生じる有害物質を除去することにも有効だったに違いない。こうして根の活性を維持したことが、日本一の多収をあげる結果につながったのだろう。

土肥が工夫した水のかげひきは、29年に日本一になった井波町（現在の南砺市）の川原宗市の手でさらに磨きがかけられた。なだらかな傾斜地にあった彼の田は灌排水が自由にできる。彼はここで間断灌漑を駆使し、夜間のかげ流しも実施して994kgの多収を

---

<sup>1</sup> 新・日本の農を拓いた先人たち（7）多収技術に化学の光、「米作日本一」農家が教えてくれた水のかげひき、西尾敏彦、『農業共済新聞』2008年7月2週号（全国農業共済協会）<https://www.jataff.jp/senjin4/15.html>（2020年9月4日アクセス）

あげた。川原の工夫はさらに昭和 30 年度の米作日本一上楽菊（じょうらくきく）に受け継がれる。

2. 高橋正輝（2013）は、「米作日本一表彰事業と長野県の米多収穫技術の進展」<sup>2</sup>と題する、日本土壤肥料学会講演要旨集で次のように述べています。

コメの多収穫は至上命令であった。この間、長野県から 8 回、米作日本一農家が輩出した。米作技術は、他の作物栽培と同様に総合技術であるが、土づくりなどの土壤改良や水管理および施肥法などの土壤肥料技術が大きな役割を占めている。施肥法に関しては、昭和 30 年代に松島により V 字型稲作理論が提唱され、各県でも青森の深層追肥、施肥配分長野方式、佐賀の後期重点施肥法など新しい施肥技術が開発されたが、米作日本一の技術の多くは個々の農家が長年にわたり切磋琢磨して築いてきた篤農家技術であった。日本一農家の北原昇は弱老朽化水田を含鉄資材やようりんの投入、客土、深耕、堆肥 2t/10a の連年施用と無硫酸根肥料の施肥などにより 1,024kg/10a を、小池政之は標高 1,080m の冷害常襲地帯においてりん酸吸収係数 1,570 の水田を多量客土と大型農機による超深耕およびけいカル、ようりんの投入と堆肥 2t/10a の連年施用や深水管理および無硫酸根肥料の施用などにより 975kg/10a の多収を達成した。長野農試では、米作日本一農家の技術解析により普遍性のある多収技術の解明が行われ、それらに基づいて多因子実験法による施肥法試験から施肥配分長野方式が確立された。西澤満司は本施肥法を根幹にした多収技術により 942kg/10a を収穫して最後の米作日本一に輝いた。

3. 楠淵欽也（1987）は、「新しい植物育種技術」中の「米作日本一の歴史と育種」<sup>3</sup>で、以下のように述べています。

「米作日本一」表彰事業は、戦後の食糧難時代における米の自給を目標とする国家的増産運動の一環として、1949 年から 1968 年までの 20 年間にわたり、朝日新聞社と農林省との共催で実施された。全国的規模で行われ、参加農家数は約 40 万戸にのぼった。

日本一の栄誉を勝ち得た 20 人の精農家の実績は、反収 1t 以上が 3 例、0.9t 以上が 6 例に及ぶという実に驚嘆すべきものであった。

これらの多収技術に共通するポイントとして、耕土の培養、適品種の選定、健苗の育成、施肥の合理化、適切な水管理の 5 点があげられている。

品種についてみると、西日本では金南風（きんまぜ）、千本旭（せんぼんあさひ）、ベニセンゴクなど短強稈品種が、東日本ではふ系 55 号、オオトリ、フジミノリ、ヨネシロ、レイメイなど青森県藤坂支場育成の耐冷多収品種が目につく。なお、本事業の前期（1949～'58）では金南風、農林 24 号、農林 18 号、千本旭、農林 25 号、藤坂 5 号、トワダなどが主役であった。これらの品種はいずれも品質面で不評をかい、やがて姿を消すことになる。続く後期（1959～'68）の主役品種としてはホウヨク、シラヌイ、レイメイ、など短強稈耐肥性品種や、日本晴、ササニシキなど良質品種が登場してくる。

<sup>2</sup> 米作日本一表彰事業と長野県の米多収穫技術の進展、高橋正輝、日本土壤肥料学会講演要旨集 59 巻、2013 年 [https://www.jstage.jst.go.jp/article/dohikouen/59/0/59\\_191\\_3/\\_article/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/dohikouen/59/0/59_191_3/_article/-char/ja/)（2020 年 9 月 4 日アクセス）

<sup>3</sup> 新しい植物育種技術、中嶋哲夫監、養賢堂、1987、第 8 章困み記事

<sup>4</sup> コメの多収：限界への挑戦、吉永悟志、農学会・日本農学アカデミー 公開シンポジウム 2017/3/11 食料は足りるのか 2 ー生産を支える新技術ー、2017 年 <http://www.nougaku.jp/pdf/sympo2017.3.11/1yosinaga.pdf>（アクセス日 2020 年 9 月 4 日）

特に「米作日本一」事業は多収性品種の開発への呼び水となり、短強稈で受光態勢や登熟性の優れた各地域の基幹となる多収品種の育成に大きな刺激を与えてきたという意味で戦後の育種の発展に大いに貢献した事業とみることができる。

最後に、吉永悟志（2019）が、農学会・日本農学アカデミー公開シンポジウム「コメの多収：限界への挑戦」<sup>4</sup>において、米作日本一の技術要素をまとめているので、そのスライドを紹介しておきます。彼は、米作日本一の技術要素として、次の3点を挙げて説明しています。

1. 土壌環境の改善：

- 平均の耕深 19cm という深耕
- 排水改善による間断灌漑で栽培期間の 80% を乾田状態に維持
- 10a 当り窒素 20kg 以上の多施肥、客土、深層施肥と有機物の多投入

2. 各種栽培技術の集積：

- 健苗の育成
- 早植えによって気象条件への適合を図る
- 密植

3. 品種の選定：

- 当時の多収品種を採用し、栽培技術を駆使してその品種性能を発揮させる

なお、日本一に輝いた 20 人の農家とその収量、および技術については、「米作日本一 20 年史 1949-1968」朝日新聞農業賞事務局編 朝日新聞社（1971）をご参照下さい。

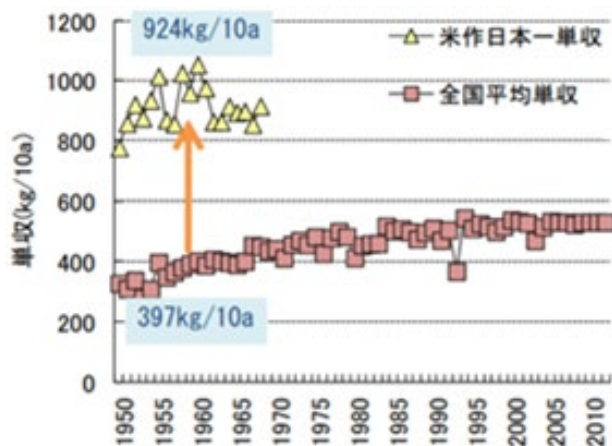


図 47-1 米作日本一事業における多収達成

<http://www.nougaku.jp/pdf/sympo2017.3.11/1yosinaga.pdf>